

環の hemodynamic infarction と判断して本法を施行した。

【手術手技】 Combined anterior temporal/pterygoid approach にて広く開頭して側頭葉を後方に強く引き、また小脳テント縁を一部切除し、動眼神経後方にて end-to-side bypass を施行した。subtemporal approach に比較して術野が浅く、多方向からの縫合操作が可能であった。2 症例とも術後に一過性の動眼神経麻痺を認めたが、虚血性/出血性合併症は認めなかった。

【考察】 1982 年の Ausman らによる報告以来、subtemporal approach による STA-SCA bypass 術が標準的治療として行われて来たが、狭く深い術野のため手術合併症が比較的多く報告されている。我々が開発した trans-sylvian STA-SCA bypass は術野を広くかつ浅く確保可能であり、より確実な STA-SCA bypass が可能と考えられた。

## 7 脳動脈瘤直達術後の原因不明の一側視神経障害について

中川 忠・北澤 圭子・鎌田 健一  
森 宏・小股 整\*

社会医療法人三之町病院  
脳神経外科  
県立小出病院脳神経外科\*

【目的】 脳動脈瘤直達手術後に生ずる合併症として一側視神経障害は稀である。文献的にも術後合併症の視神経障害に関する論文は非常に少ない。術後に手術側に視神経障害が見られた際に手術操作による視神経障害とまず考えるが、middle cerebral aneurysm (An) など、視神経と離れた An の直達手術の際にも生ずる。動脈瘤直達術後に手術側の一側視神経障害が生じた症例について検討した。

【対象】 視神経に直接手術操作が影響する paraclinoid An 例を除く、術後一側視神経障害を生じた ruptured 及び unruptured An の 4 症例である。

〔症例 1〕 58 才、女性。Rt M1M2 An (unruptured) に clipping を行なったが、視神経には触れなかった。術後 5 日目に右眼下方視野障害を訴

えた。

〔症例 2〕 55 才、女性。Lt M1M2 An (ruptured) に clipping を施行。術後 5 日目に左眼下方視野障害を訴えた。

〔症例 3〕 59 才、女性。Lt M1M2 An (ruptured) に clipping を施行。術後 6 日目に左眼下方視野障害を訴えた。

〔症例 4〕 58 才、男性。Lt IC-PC An (unruptured) に clipping を行なった。術後 2 日目に左眼下方視野障害を訴えた。

【結果及び結論】 4 症例とも視神経障害は術後 1 週間以内に発症をみたが、症状の自覚が遅れたと思われ、発症は術早期と考えられた。手術操作による直接的障害は考えにくく、また視神経障害は全例に同一の視力障害、水平性視野障害を認めたことから、短毛様動脈の血流障害による虚血性視神経症と診断された。SAH による脳血管攣縮の影響と考察している文献もあるが、今回の検討では unruptured An 例でも生じているので、一側視神経障害の原因は特定出来なかった。術中術後の対処法はないが、動脈瘤直達手術の際に念頭におくべき稀な合併症の一つと思われた。

## 8 Spasm 撲滅方策—破裂脳動脈瘤 clipping, 直近 35 例中 34 例での成功 (infarct 出現なし) 経験

柿沼 健一・渡辺 秀明・梨本 岳雄  
菊池 文平・佐藤 洋輔

新潟労災病院脳神経外科

【目的】 spasm による悪化防止に焦点を絞った新しい protocol を設定した 2008 年 10 月以後の成績を纏めた。

【対象, 方法】 内訳は、grade 1 (5 例), grade 2 (10 例), grade 3 (12 例), grade 4 (4 例), grade 5 (4 例) の clipping 直近総計 35 例である。Clipping 後に 30 分程度の残存血腫の除去を行い、3F の drain を 2 本設置して、術後翌々日から urokinase による脳漕灌流を行った。脳漕灌流は簡便化し、生食 50cc に 1.0 から 2.0 万単位の urokinase を溶解し毎分 1.0 から 1.5ml で drain の